



# 姫の惑星

---

---

大本正

---

## episode1

---

その星は、ありえない惑星であった。なぜなら、星の住民はみなこの星を治めるプリンセス・メアリーと同じ顔なのだ。どういうことかと言うと、国民を全員自分にすれば反乱や革命は起こるはずがないという考えの下、

「国民反乱防止」のためにプリンセスが自分のクローンを大量に作ったのである。

というワケで、元々メアリーの王国で暮らしていた国民はみな殺されたワケだが、その時の惨状は筆舌に尽くしがたい。数十万の国民を短期間で抹殺した王室直属の戦闘部隊、真ラザロ騎士団の団員は、みなプリンセスの美しさに心酔し、彼女のために死ぬことをもいとわない猛者どもであった。

その後、プリンセスの命を全うしたにも関わらず、真ラザロ騎士団員はみなプリンセス自身に自死刑を宣告された。

しかしみな動揺することも無く、一流の戦士として果てたのであった。

彼女を敬愛しこそすれ、裏切りを考える団員はひとりとして存在しなかったが、プリンセスはどれほど盲目的に慕われても彼らを心から信頼することは無かった。

数年前の惨劇を忘れた「現在の国民」は大量の血を吸った大地の上で誰ひとりプリンセスに対して不平を口にすることも無く明るく楽しく生活していたが、ある日、とんでもない事件が起こった...

同じ人間しか暮らしていないこの星の上で、プリンセスと同じ顔の少女しか暮らしていないメアリーの王国で

殺人事件が起こったのだ。この事件を解決するべく王室は他の惑星の名探偵に事件捜査を依頼した。

それが遺体発見の数十分後、午前11時00分であった。

## episode2

---

午前11時10分。少女探偵、星マリコを乗せた亜光速宇宙艇はプリンセス・メアリーの王国の宇宙空港に到着した。

「王室じきじきの迎えが来ているはずなんだけどな...」

入国審査のために第1ターミナルにいたマリコは辺りを一瞥した。空港は旅行者とクローン少女でゴッタ返していたが、旅行者以外はみな同じ顔であったため、マリコは迎えが来ているのか来ていないのか全くわからなかった。

約束の時間までしばらく時間があつたのでマリコはひまつぶしに人間観察を始めたが、それは無駄であった。なぜなら周囲の人々はみなプリンセス・メアリーと同じ顔をしていたからだ。

だが、誰もが同じ顔をして同じような表情をしている中、大勢のクローンたちとは異なる表情の少女をマリコは見逃さなかった。その少女は周囲の少女たちと同様にプリンセス・メアリーと全く同じ顔をしていたのだが、

激しい怒りを浮かべた表情に少々の悲哀が混じっており、躁病のように明るい周囲の少女達の表情とは一線を画していた。

少女はマリコに観察されているとも知らず、何かに追われるように手続きカウンターの方へ消えていった。

やがて、お迎えの侍従長、首相、警視庁長官の3人に伴われ、早速、殺人現場である王宮内の一室に案内されたマリコは被害者を見たが、現場に来る前から考えていたマリコの推測通り、血だらけで横たわっている被害者は、

マリコのそばで遺体を見下ろしている侍従長、首相、警視庁長官の3人と全く区別がつかない。つまり、被害者はプリンセス・メアリーと同じ顔をしていたのだ。

「犯人もプリンセス・メアリーと同じ顔をした者に違いないわね」とマリコは囁いた。

## episode3

---

警視庁長官は出し抜けに言った「マリコさん、報道では伏せていますが...  
被害者はじつはプリンセス・メアリーなのです...」

「本物のプリンセス・メアリーですか？」とマリコは聞き返し、警視庁長官はうなずいた。  
「長官、被害者がプリンセスだという証拠はあるの？顔を見ただけではわからないわ」  
「マリコさん、この服は姫が愛用していたものなのです。間違いありません」と侍従長は答えた。  
。

プリンセスと同じ18歳である若い聡明な探偵マリコはしばらく沈黙したあと、口を開いた。

「みなさん、いいですか。この事件の真相を解くカギ、それは被害者が本物のプリンセスであるかどうかでもないし、  
また犯人特定なんかでもないんです。どれも重要じゃないんです」  
「この事件一番の問題。それは動機なんです...」。

## episode4

---

「自殺においては動機が一番重要なんです」とマリコは言った。

長官は青くなりながら「待ってくださいマリコさん。これは自殺ではありません。殺人です。いったい何を  
言い出すんですか？プリンセスは誰かに殺害されたのです。あなたには必ず事件を解決していただきます。  
さもなければこの国から出すことは出来ません」

同じ顔をした遺体を前に「自殺ではなく、殺人である」と力説する3人はまるで恨みごとを言う亡霊のようであった。

「あなた方にとって事件の解決とは何を意味するかお聞きしたい」とマリコは聞いた。  
「もちろん、犯人逮捕です」と侍従長は赤くなりながら言った。  
「この国では被害者の特定も犯人逮捕も無意味です。事件も既に解決しているようなものです。  
というか、  
事件は起きていないんです。  
犯人を逮捕したければそこらへんにいるプリンセスのクローン少女を連れてきて死刑にしろなさい。  
あるいはそこらへんにいるクローン少女を捕まえてきてプリンセスの服を着せなさい。  
プリンセスは死んでいないし、事件も起きていません。  
この一件は、プリンセス・メアリーがいつか見た悪い夢のようなものです」

「あなたは探偵というよりは哲学者ですね」と首相が笑った。

## episode5

---

その晩、マリコはホテルで電子ノートを開き、食事を取りながらモニターに映る男に見入っていた。

給仕中のメイドが「お仕事ですかぁ？」と聞くが、マリコは無視してモニターに見入っている。メイドはそっとモニターを覗き、それからマリコの顔を見た。その様子から男はマリコの知人ではないことがわかった。「きっとお仕事で監視してるのね... モニターの中の男の人、虫かごの中の虫みたい...」

「ねえ、あなた誰か殺したいと思ったことある？」マリコの問いに驚きもせずメイドは「ありませんわ。だって、みんな私と同じ顔なんですもの」と答えた。

「ほんとにおもしろい国ね。この国はある意味永遠よ。でも万が一この国が滅ぶことがあるとしたら...

それはばかでっかい自責の念のしわざね...

ねえ、あなたこの国の歴史教えてくれない？この国の歴史を知ることはメアリーのすること知ることだもん...

あたし、メアリーのことがすごく知りたい」

しかし、メイドは既に退室しており、そこには代わりに侍従長がいた。

「え？あなた侍従長さん？いつのまにいらっしゃったの??」

「え？区別つきませんでした？」とふくれる侍従長に「あ、いや。そういえば服が違うけど...」と慌てるマリコ。

「わたしは長いこと、といってもここ数年のことですけど、ずっとプリンセスの周りのお世話を担当しておりました。

わたしは生まれたてのクローンですのでこの国の歴史はわかりませんが、姫のことならよく存じております」

「おんなじことよ。姫のことを知るのはこの国を知ることだもん」とマリコは目を輝かせた。

「じつは、プリンセス・メアリーには意中の男の方がありました。しかし、その殿方はプリンセスのことなど

眼中になかったのです。美しくプライドの高い16歳のメアリー様は数日間もご自分の部屋に閉じこもりになられ、

一週間後に出てきたと思ったらいきなり国民を全員抹殺しろという命令をお出しになったのです...」

マリコは妙に納得した様子であった「それが国中の人間がプリンセスと同じ顔の発端なのね...」

## episode6

---

「あんた何もわかってないね」マリコが手洗いから出るとそこには生意気な口を聞くメイドがいた。

「あんたホントに何も分かっていない」

「ふうん、あたしが何をわかっていないかあんた分かるの？」マリコはそう言いながら少女を観察した。

彼女の顔は、この国の国民の特徴の通りプリンセス・メアリーと全く同じだが、

この少女にはクローンにはない特徴がある。それは、独自の個性だ。

過去がヒトを成立させるが、過去が無いクローンには体験を通じて形成される独自の印象というモノがない。

生まれたばかりのクローンには歴史がなく、躁病のようにやたらに明るいのだ。

しかし、マリコの部屋を訪れたこの少女は明らかにこの国の国民、クローン人間とは印象が異なっていた。

マリコは少女を見据えた。「あなた... プリンセス・メアリー？」

少女は笑った。「あんたホントに何もわかってないね。兄弟は他人の始まりだって言うでしょ？クローンもそれと同じなの。いくらクローンでも頭脳は出来上がっているんだから数年も生きていれば

自分自身の利益だけを追求するようになるものよ」

「あんたの言ってることがわからないわ」とマリコは言った。

「あんた、それでも宇宙一の少女探偵なの？これはね、クーデターなのよ」

マリコは事情が飲み込めないようであった。

「今日アンタが会った、あの3人。侍従長と首相と警視庁長官。覚えてる？いいこと？プリンセス・メアリー殺人事件の捜査を依頼したあの3人がプリンセスを殺したのよ」



## episode7

---

「マリコさん、だらしがないね。あんたはスパイも見破れないのかい？」  
と言って少女はさっき帰宅したはずの侍従長の死体をゴロンと転がした。  
さすがに修羅場をくぐってきた名探偵だけにはあり、マリコは死体を見てもひるむことはなかったが、  
声の調子はいきなりうわづっていた。

「なぜ侍従長さんを殺したの？」  
「あたしは、侍従長なんか殺してないよ。こいつは成りすましのスパイさ」  
「スパイ？」  
「そうだよ。あの3人が送り込んだスパイさ。あんた思ったより我が強いからなんとかニセの情報でミスリードしたい、  
そんなとこだらうさ。こいつはその役を仰せつかわされたんだ。  
あの3人は、デタラメでもいいからあ・ん・たにプリンセス殺しの犯人をあげて欲しいのさ。  
それまではあんたを国から出さないつもりだろうね。だから、間違っても正しい推理をしないことだね...」

「あの3人はあたしを操作したいワケ？このあたしを？」  
「あんたみたいに権威のある人物を思い通りに出来れば自分達の罪、クーデターも隠すことが出来ると考えてるのさ。あんたが公で誰かを犯人だと発表すればそいつが犯人になるんだ。それが権威ってもんだろ」  
「あなたは誰なの？」  
「残念だけどあたしはプリンセス・メアリーじゃないよ。プリンセスは死んでしまったんだ...  
あいつらに殺されたんだ... あたしは姫のそばでいつも話し相手になってあげていた。友達役さ。  
。姫の部屋の奥には侍従長や重要な役職に付く人物でさえ入れない部屋があって、あたしたちのような選ばれた数人、  
姫の真の友人しか入室できなかった。あたしはそのひとりだったんだ」

しばしの沈黙...

「メアリーは楽しんでいたの？」  
「え？」と少女はマリコに聞き返した。  
「いくら大人数が話を聞いてくれてたって... 聞いているのは全部自分なのよ。独り言と一緒にじゃない」

「プ、プリンセスはいつも喜んでくれていたわ！」

今まで冷静に、そしてマリコを蔑んでいた少女の頬を一筋の涙が流れた。

泣きながら弁解する少女は本物のプリンセス・メアリー以上に本物らしかった。

銃声が出て少女は倒れた。玄関にはあの2人、首相と警視庁長官が立っていた。

## episode8

---

「マリコさん、おけがはありませんか？そいつのウソに惑わされないで、そこに転がっている遺体は間違いなく侍従長なのよ。そいつは人殺しよ！」と警視庁長官が少女を見据えて叫んだ。

少女は足に銃弾を受けたが、重傷には至らず、黙って警視庁長官と首相をにらみつけていた。

「侍従長はあなたから電話を受けてこの部屋を訪問したのです。内密に話があるということで彼女はひとりであなたを訪問したのです」

「あたしは王室に電話した覚えなんかないわ」

「そこにいるスパイがあなたをかたって侍従長を呼び寄せたのです」

わからないことだらけのマリコは3人を前にしてただの少女になっていた。

「わたしたちは、そこにいるスパイが裏にいるのを確信して侍従長を泳がせました。

わたしたちはプリンセスの居どころを知っているそのスパイに用があったのです」

少女スパイはキッと長官をにらみつけた。

「プリンセスの居どころ...??」

「そのコはプリンセス搜索を混乱させるために侍従長とあなたを殺してあなたがたが諍いから殺しあって死んだという情報を作ろうとしたのです」

「プリンセス搜索...??」

マリコは黙って少女スパイを見た。スパイもマリコを見ていた。

スパイはふところから電子ナイフを取り出しマリコに襲いかかったが、長官がスパイにトドメをさした。

「あんたたちなんかブツ殺してやる！あんたたちなんか大嫌いよ！！」スパイ少女はもだえながら叫んだ。

「ふん、死ぬのはあんたでしょ」と長官が冷たく笑った。

同じ顔をして罵りあう両者を見てマリコは戦慄した。こんな状況はマリコにも覚えがあるのだ...

いまわの際にスパイが声をしぼりだした「もうプリンセスは見つからないわ」

そう言ってスパイは息絶えた。



## episode9

---

「じつはプリンセス・メアリーは殺害されていません。失踪したのです。その少女スパイがプリンセス・メアリーのたつての願いからプリンセスの逃亡を手助けしたのです」

「それじゃあ、あの殺人事件は…」と言いかけてマリコは黙り込んだ。

「この国はクローン少女だらけをウリに観光立国として成り立っていましたから、その国の姫が逃げ出しただなんて宇宙中に知れ渡ったら観光客も激減してしまいます…

それでプリンセスが殺されたことにしたのです。

あなたを呼び寄せて事件の捜査をしてもらいながらわたしたちは裏で本物の姫の捜索をしていたのです」

「ところで、なぜプリンセスは逃亡したのですか？」

「姫の逃亡の動機はわたしたちもまったく把握できていないんですが…  
まったく無責任にもほどがあります」

「ですけど、あなたがたもなぜ本物のプリンセスにこだわるんですか？代わりはいくらでもいるのに」

マリコはそう言うとなんかに気づき、おそろおそろ口を開いた「プリンセスが逃亡した動機は…自分の身の危険を感じたからかもしれませんね。

つまり、あなたがたが実際にクーデターを企てていた、そしてそれを少女スパイが知り…スパイがプリンセスを逃がした…

そしてスパイは逃がした姫を探し当てられないようにあたしも殺そうとした…」

首相はマリコの発言を無視し「ところで、わたしたちが姫を探し当てるまでの間、マリコさんには約一年間、

擬似殺人事件の捜査を演じていただきたいのですが、ご了承くださいますか？

わたしたちは本物の推理を求めています。演じられた推理を求めているのです」



## episode10

---

「この星に一年間も閉じ込められるのはごめんだわ...」

メイドは電話の向こうで言った「マリコさん、もう帰っちゃうんですかぁ？」

この同じ顔のクローンだらけの国で、マリコはなぜかこのメイドだけは気に入っていた。

「チェックアウトはいつ？」「10時です。今から朝食をおとどけにあがりますけどあとでサインしてくれますかぁ？」

「うん、いいよ」そう言ってマリコは受話器を置き、溜息をつきながら電子ノートを広げモニターに見入った。

メイドが朝食を運んできた時、マリコの姿は見えなかった。

机の上に電子ノートが広げっぱなしになっていた。「おトイレかな」

そう言ってメイドは電子ノートに興味津々で近づいていった。

モニターの画面は真っ暗だったが、しだいに暗がりでは何か動いているのが見えた。

メイドは顔を真っ赤にしてとっさに電子ノートを閉じてしまった。

「あ、いけね」見渡してもマリコは見当たらない。

「朝食置いていきますねえ」そう言ってメイドは退散した。

メイドが去ったのを確認してからトイレから出てきたマリコはジュースに口をつけただけで卵料理、

クロワッサン、サラダにはまったく手を付けなかった。

そして、マリコはメイドとの約束もすっぽかし、さっさとチェックアウトした。

## episode11

---

マリコは、人工衛星で完全な監視をされていることを肌で感じながら宇宙空港に向かった。王室の命令からは逃れられないことを認識しつつ、街の風景があまりに日常的で異常も感じられないので

希望的観測が理性に勝り、このまま空港に着けば何ごとも無く自分の星に帰れそうな気がしたのだ。

しかし、空港に到着するなり、彼女はとっさに空港内のトイレにかけこんだ。

マリコは、同じ顔の少女たちをこれ以上見たくなかったのだ。周囲にいるクローン少女たちがみんな、じつは

自分のまわりをうろついて弱みを握ろうとしているスパイのように見えたのだ。

ふと気づくと、隣の個室から血が漏れていた。マリコはカギの掛かっている扉を開けた。そこには昨日見たクライ顔の少女が胸に刃をつきたて、血だらけになって苦しんでいた。

哀れなプリンセス・メアリーはマリコと同じ気持ちに襲われ、トイレに駆け込み、外宇宙への逃亡を断念し、自殺を図ったのだ。

息も絶え絶えのメアリーは震える手で男の首を抱きかかえていた。

その首はプラスチック加工され、ギリシャ彫刻のようであった。

ショックを受け、打ちひしがれたマリコは転がる首をジッと見ていた。

「ホントは殺したくなかった...」

マリコはそんな声が聞えたように思ったが、それがメアリーの声なのか自分の声なのかわからなかった...

男の首を抱えたマリコは鏡を見て、自分はこの星から逃げられないということに気づいた。



## 姫の惑星

<http://p.booklog.jp/book/88226>

著者：大本正

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/danejin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88226>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88226>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ